

研究概要報告書【音楽振興部門】

(1/3)

研究テーマ	パラオ・日本・沖縄を繋ぐ3つの日本語歌謡の調査研究と歌の再創造を通じての記憶の継承	報告書作成者	小西潤子
研究従事者	小西潤子 平田あゆみ		
研究目的	戦後 80 年を迎え、戦前パラオで生まれ現在も継承される日本語歌謡のみならず、ペリリュー島の日本守備隊玉砕さえ忘却されつつある。本研究では、戦前から今日までパラオ、日本、沖縄を繋いでうたい継がれる「パラオの花々」、「緑の島の墓」（「緑の島のお墓」とも）、「ペ島の桜を讃える歌」という3つの日本語歌謡を対象に、楽曲分析と歌詞の比較、聞き取り調査からその成立経緯を明らかにする。この知見をもとに、高大連携事業によって、高校生と共にパラオ、日本、沖縄の関係性と人々の記憶を継承する学習の機会を設けることを目的とする。 本研究は、2024 年の日本人による「緑の島の墓」の再発掘、再録音（『南日本新聞』）から着想した。この歌詞は、ペリリュー島に眠る日本の「英霊」が日本からの墓参者に感謝を告げ、現地の人々が平和を祈る内容である。YouTube では、この曲と類似するメロディからなる「ペ島の桜を讃える歌」も公開されている。これは、戦中に弾丸が降り注ぐ中で、日本兵が祖国や父母、妻子を思いながら「桜」と叫んで玉砕する写実的な内容を含む歌詞からなる。これらの原典は、『日本パラオ愛唱歌集』（NPO 法人緑の基金編）だと考えられる。研究代表者は、これら 2 曲と共通するメロディからなる「パラオの花々」にも注目する。これは、日本への送還船の中でうたわれた歌で、前者 2 曲の先行曲である。そこで、3 曲の楽曲分析と歌詞の比較を行う。「パラオの花々」は、日本人がパラオで創作したとも言われるが、「緑の島の墓」と「ペ島の桜を讃える歌」は、パラオ人の作詞作曲の日本語歌謡である。そこで、沖縄在住の「パラオの花々」の提供者、パラオの知識人や日系人、ペリリュー島の作詞作曲関係者らへの聞き取り調査を行うと共に、戦後の日本からの墓参者に関する文献調査等によって情報収集し、これら3つの日本語歌謡の関係性を明らかにしたい。 以上の研究成果については、関連学会や論文による公表のみならず、京都堀川音楽高校の全校生徒にわかりやすく講演をした後、代表の生徒と共にパネルディスカッションを行い、日本とパラオの人々の交流が生んだ歌がいかに人々の「生きる力」となってきたかについて考察することとしたい。これら3つのパラオで成立した日本語歌謡は、単なる日本の植民地統治支配の遺物ではなく、ましてや悲惨な戦争の歴史を伝える媒体にとどまるものではない。音楽高校や音楽大学で西洋クラシック音楽を専門に学ぶ生徒や学生は、日頃音楽を技術面だけで捉えがちになる。そうした中で、パラオにおける歌の創造や継承の流れについての知見を提供したうえで、より幅広い観点から音楽と人間について考える機会としたい。これをきっかけに、若い世代の音楽に対する視野や価値観が広がり、ひいては豊かな音楽文化の醸成と発展への道に繋がることを期待したい。また、高校生の取り組みを沖縄のパラオ会メンバーを始めとする帰還者や在パラオ日本大使館、パラオ・コミュニティ・カレッジ、元文化大臣等、パラオの関係者らに伝え、両国の親善に寄与することとする。		

研究内容	《パラオの花々》の成立と作詞作曲者は不明だが、1946 年、横須賀行きの引き揚げ船のデッキでこの曲を記憶した証言から、3つの歌のうちもっとも成立年が古い。歌詞は、レモンの花、鳳凰花(南洋桜 [沖縄ではデイゴ])、イカダカヅラ(ブーゲンビリア)、サンダンカ(山丹花)、仏桑花(ハイビスカス)と、パラオに咲くさまざまな花とその風景を思い浮かべて、パラオとの惜別の念を表す。1942 年パラオの小学校教員として赴任した水野夫妻の妻シヅ氏の手記『仏桑華は碧空に映えて』(1985)には、夫の遺品の中に見出したという、この歌詞が掲載されている。作詞・作曲者名は記されていないが、現地徴兵されてペリリュー島での激戦とパラオ山中で飢餓を生き抜き、1946 年1月末、引き揚げ船で浦賀に到着した夫・隆一氏の足跡と歌の記憶の証言が一致することがわかった。また、この歌が次々と亡くなる戦友、その亡骸を葬ることさえ叶わない絶望感、生き残った者の自責の念を制して、美しいパラオとの別れを表現した歌だと解釈が深まった。 《緑の島の墓》の歌詞内容は、いくつかの各出版物等に掲載されているが、曲名および作詞作曲者名の表記や情報は錯綜している。そこで、これらを整理したうえで、2025 年 8 月のパラオで聞き取り調査を行った。これにより、作詞作曲者とされるウエンティ夫妻の表記としては、夫トンミー・ウエンティ Tongmy Wenty(以後、トンミー)、妻アントニア・ウエンティ Antonia Wenty(以後、アントニア)が正しいことがわかった。1968 年ようやく現地での遺骨収集が可能となり、以来、ペリリュー島民と日本の慰霊墓参団との交流が始まった。1970 年 8 月 6 日～8 日ペリリュー島の人々に対する感謝として、首長クロールバク・オバク氏(70 歳)、部落長代理・小学校副校長ウエンティ・トンミー氏(47 歳)を含む計6名が群馬県に招聘された。オバク氏は「島のいたるところに洞窟や日本のペリリュー島守備隊の陣地があり…私たちは島全体をお墓と思って、大切にこの島、日本将兵のお墓をいつまでも、いつまでも守り抜いていきたい」と挨拶し、遺族代表は「灼熱の太陽と、火焰に焼かれたであろう息子を思うとき、故郷の冷たい水を一口でも手向けてやりたい…その地にはとうてい参れないのです」と答えた。そして、代表は「英霊のことは私たちが必ずお守りしますから、どうぞご安心ください」と遺族 1 人 1 人の手を握ったのである(歩兵第 15 連隊史刊行会編 1985, pp. 1455-1456)。1975 年には、群馬県より 2 名、歩二会から 2 名がパラオ諸島戦没者遺骨収集政府派遣団に加わっている。その記録の中に、島の人々が日本のペリリュー島守備隊の戦没者墓苑を「みどりの墓苑」と称して保護管理をしていることが記されている(藤田 1988, p. 523)。《緑の島の墓》の成立は、1976 年まで遡れることがわかった。 《ペ島の桜を讃える歌》作詞者の沖山トヨミ氏および庄子シゲオ氏の両日系パラオ人は、ペリリュー戦勃発前にパラオ本島に避難させられており、戦闘には巻き込まれてはいない。それゆえ、1～4 番のペリリュー島守備隊の戦闘や玉砕の描写は、船坂弘氏の指導による創作だといえる。歌詞の 5～6 番で戦没者を勇士、7～8 番で慰霊墓参団に再訪を呼び掛けるのは、日本とパラオの両方ルーツを持ち、戦後日本から分断された沖山氏自身の気持ちとも重なる。玉砕した日本のペリリュー島守備隊の勲功を永久に讃える体をなす《ペ島の桜を讃える歌》もまた、分断と別離へ悲嘆を秘して生きる者の覚悟をうたった歌でもあると解釈できた。
------	---

研究のポイント	両大戦間に日本の委任統治支配下におかれたパラオでは、日本語(混じり)の歌が創作され現在に至っているが、その90%ほどは恋愛歌である。それに対して、《パラオの花々》、《緑の島の墓》、《ペ島の桜を讃える歌》の3つの歌は、パラオを舞台したアジア太平洋戦争に関わる日本語の鎮魂歌であり、これらに共通するメロディが一部用いられていることは偶然とは考えられない。楽曲分析と歌詞の比較、聞き取り調査から、これら3曲の成立経緯を明らかにする。その研究成果については、関連学会や論文による公表のみならず、京都堀川音楽高校の全校生徒にわかりやすく講演をした後、代表の生徒と共にパネルディスカッションを行い、日本とパラオの人々の交流が生んだ歌がいかに人々の「生きる力」となってきたかについて考察すること、高校生の取り組みを沖縄のパラオ会メンバーを始めとする帰還者や在パラオ日本大使館、パラオ・コミュニティ・カレッジ、元文化大臣等、パラオの関係者らに伝え、両国の親善に寄与することが研究のポイントである。
研究結果	研究結果は、①報告、②論文、③口頭発表、④講演とパネルディスカッションにて公開した。 ① 小西潤子 「パラオ・日本・沖縄を繋ぐ3つの日本語歌謡の調査研究と歌の再創造を通じての記憶の継承」カワイサウンド技術音楽振興財団機関誌『サウンド』41、pp. 20-24、2026年1月。 ② 小西潤子・平田あゆみ 「パラオで生まれた《パラオの花々》《緑の島の墓》《ペ島の桜を讃える歌》—その歌詞の解釈と成立及び普及とその背景に関する考察—」『ムーサ』27、pp. 1-16、2026年3月。 ③ 小西潤子 「パラオの日本語歌謡 《緑の島のお墓》」の歌詞と楽曲の分析—パラオ、日本、沖縄の再接続と記憶の継承に向けて—」2020年次日本島嶼学会羽幌天売島大会 於：羽幌町中央公民館 2025年8月30日。 ④ 小西潤子 「生きる力としての音楽—日本とパラオの人々の交流が育んだ歌心」『人とつながる音楽家シリーズ—小西潤子先生をお迎えして』、於：京都市立京都堀川音楽高等学校ホール、2025年12月9日。
今後の課題	2025年12月、高齢のため最後の訪問との心づもりで慰霊墓参を行った田中順一氏(92歳)は、パラオ在住の沖縄県系人3世、4世による交流の継続に期待を抱いている(琉球新報 2025)。2021年工作を通じてパラオとの民間外交を始めた黒木猛氏(在パラオ日本大使館 2025)も、帰還者の孫世代とも関わりながら、墓参と歌による慰霊を継続している。こうした次世代への継承に向けての人々の営みを追いながら、これら3つの歌の無形文化遺産としての活用方法について、検討していきたい。また、音楽分析についてはほとんど触れることができなかった。それぞれの歌詞は、重苦しさを感じさせない親しみのある3/4拍子または6/8拍子の長調のメロディにのせてうたわれる。その明るくさえ聞こえる響きにこそ、深い哀切と生きる覚悟の気持ちが込められているといえよう。これらのメロディに共通する部分がいかなる経緯で借用されていたのか、またそのオリジナルが存在するのかは、ペリリュウ島での情報収集の継続により、引き続き検討したい。

採譜・比較譜作成:平田あゆみ (2025)

凡例:

比較譜は、《パラオの花々》(歌唱:田中順一 2015; 佐藤友代 2018 [17~18 小節上声部])、
《緑の島の墓》(歌唱:アントニーナ・アントニオ 2016)の採譜および《ペ島の桜を讃える歌》(NPO
法人緑の基金編 2010, p. 4)をへ長調に移調し、類似の音型に合わせて小節線の位置を調整し
て作成した。

《パラオの花々》 出典：田中 2020, p. 139.

1. 海は潮風南風 わびしいパラオの夕焼けを 白いレモンの花咲いて うつろな胸へぬける風
2. 空の火炎の鳳凰花 あおげばなぜか目にしみる 雲の流れるあの空は 故郷の山へ続く空 3. 友に捧げた花束は いかだかずらさんだんか 啼いてくれるな山鳩よ くちびるかんでいるものを
4. 水平線の見える丘は やえ仏桑華の紅に 燃えては消えて数々の 遠い思いがまた浮かぶ

《みどりの島のはか》 出典：住田 1978, pp. 269-270.

1. 遠い故郷からはるばると お墓を参りにありがとう みどりのお墓のお守りは ペ島にまかせよ いつまでも
2. 海の中にも山の中 ジャングルの中にも土のなか 英霊よろこべ安らかに一緒に暮らそよ とこしえに
3. ペ島の願いは唯一つ 日本とペリリューは親善の友 かよわい力よく合わせ知らせておくれよ 祖国まで
4. 伝えておくれよ祖国まで 父母兄弟妻や子に 僕は緑の島暮らし 涙をおさえさようなら 涙をおさえさようなら

歌詞 3 《ペ島の桜を讃える歌》 出典：船坂 1981, pp. pp. xii-xiv.

1. 激しく弾雨(たま)が降り注ぎ オレンジ浜を血で染めた 強兵(つわもの)たちはみな散って ペ島は総て墓となる
2. 小さな異国のこの島を 死んでも守ると誓いつつ 山なす敵を迎え撃ち 弾(たま)打ち尽くし食糧(しょく)もない
3. 将兵(へいし)は“桜”を叫びつつ これが最期の伝えごと 父母よ祖国よ妻や子よ 別れの“桜”に意味深し
4. 日本の“桜”は春いちど 見事に咲いて明日は散る ペ島(じま)の“桜”は散り散りに 玉砕(ちれ)ども勲功(いさお)は永久(とこしえ)に
5. 今守備隊(もの)勇士(ふ)の姿なく 残りし洞窟(じんち)の夢の跡 古いペ島(じま)の習慣で われら勇士の霊魂(たま)守る
6. 平和と自由の尊さを 身を鴻毛(こな)にしてこの島に 教えて散りし“桜花”今では平和が甦る
7. どうぞ再びペリリューへ 時なし桜花(さくら)の花びらは 椰子の木陰で待ち侘(わび)し あつい涙がこみあげる
8. 戦友遺族の皆様に 永遠(いついつ)までもかわりなく 必ず我等は待ち望む 桜とともに皆さまを